

## 連載

## 新興国ウォッチ！ &lt;第10回&gt;

## オランダ病

多田 忠義

今回から、新興国が直面しがちな経済成長の過程でみられる様々な経済現象（用語・理論）を取り上げていく。

## オランダ病とは

オランダ病とは、ある国において何らかの資源が発見される、もしくは豊富に産出されるようになると、その資源の輸入を減らすだけでなく輸出を増加させることが可能となり、貿易黒字を通じて自国通貨価値が上昇する。その結果、自国製造業の輸出困難、そして不振と製品の輸入増をもたらす、国内製造業の衰退や高い失業率を招く現象である。

オランダでは、1960年代に北海海底で天然ガスが発見され、自国内消費だけでなく輸出が増え、外貨収入が急増した。これにより実質為替レートは上昇し、その他の輸出部門を圧迫するようになった。その結果、製造業などの輸出品を生産する部門の資本や労働が天然ガス開発に過剰投入され、天然ガスの過剰生産を招いたとされる。これにより、他の部門の生産活動は低迷を余儀なくされた。

さらに、この天然ガスブームは一時的な歳入増加をもたらす、オランダでは社会福祉制度を拡充して、政府支出の拡大

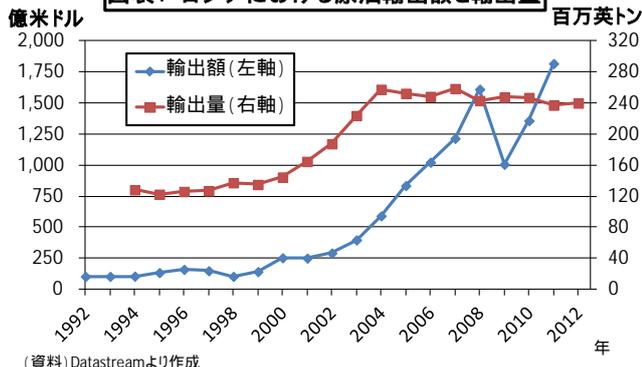
も招いた。このため、一次産品価格が下落し、歳入が減っても、社会保障制度の水準を保ち、財政規律を正すことはなかったため増税が必要となり、オランダ経済が低迷する結果となった。

## ロシアにおける原油輸出と為替レート

ここでは最近の例として、ロシアにおける原油輸出と為替レートとの関係を見ていく（図表1,2）。90年代後半以降、原油の輸出量・輸出額ともに拡大しはじめ、輸出量は2004年に頭打ちとなるが、輸出額はルーブル高が続いていることから上昇基調である。この間、ロシアのGDP成長率は年5%台を保っていたが、近年成長の伸びは鈍化しつつある。

かつてのオランダ同様、ロシアにおける一次産品の輸出が同国の経済成長に寄与しているとみられることから、オランダ病に似た景気低迷を招きかねない。また近年では、シェールガスの台頭によりエネルギー需給構造が大きく変化する可能性もロシア経済に影響を与えかねない。そのため、2000年代後半以降、ロシアでは原油輸出に依存する経済構造から脱却し、産業多角化へと構造転換を図ることで、経済成長を維持しようとしている。

図表1 ロシアにおける原油輸出額と輸出量



図表2 ロシアにおける実質実効為替レートとGDP

